

## [研究室だより]

## 江戸文学研究室

教養・基礎教育部門  
位田 絵美

はじめまして、四月より本学部教養・基礎教育部門に着任した位田絵美です。ご縁あつて、近畿大学産業理工学部の一員となれたことを素直に喜び、学生諸君の指導と研究に精進する所存です。

専門は、江戸時代の文学研究です。文学と、それを支える歴史学の史料を素材として、日本の対外認識や日本人観の分析を行っています。為政者側が指導した異国観・異国人観ではなく、民衆側から見た庶民レベルでの認識や交流を、丹念に分析するのがねらいです。従来は妄言虚語であるとして、研究対象外とされてきた編著者末詳の長崎の写本群（「長崎旧記類」）や、史実の漂流事件が脚色・物語化された過程、その結果の産物である漂流物語類に焦点をあて、これまで取りあげられなかった認識を分析しています。

活字化されていない膨大な資料には、まだまだ明らかになっていない真実が、たくさん隠されています。その一つ一つと向き合い、当時の人々の感情や認識を探ることは、実は、現代の我々の中に無意識に眠る固定概念や先入観を正しく理解することに繋がります。

真の国際化を目指すには、まず、自国の文化を正しく理解して評価する力がなければなりません。そこを基盤にして、諸外国の文化や歴史、その国との関連性が初めて理解できるからです。日本から、九州から、この飯塚から、世界へ文化を発信するために、学生諸君には、まず自分の無意識の中の認識を、しっかり理解することから始めて欲しいと思います。

今回は、この私の研究姿勢を導き、大きな感化を与えてくださった三名の先生方とのエピソードを紹介したいと思います。

## 深沢 秋男先生

深沢先生との出会いは、私がまだ大学院の修士課程に入学したばかりのこと。偶然見かけた先生のご論文に感動し、無謀にも拙稿をお送りしたのがきっかけでした。当時すでに、先生はその道の権威で、見ず知らずの一学生の不躉な手紙に

お返事下さるとは夢にも思いませんでしたが、意外にも数日後、私は分厚い封書を受け取りました。震える手で開けた中には、拙稿に対する細やかなご指導と温かい励ましがかかれ、「お互いに頑張りましょう」と結ばれていました。

「お互いに……」。この言葉に、当時の私がどれほど感動したか、分かっていたかどうか。年の離れた若輩者の私を、先生は少しも馬鹿にすることなく、同じ研究を志す者として、対等に礼を尽くして下さったのです。

それから深沢先生との、論文を通してのお付き合いが始まりました。ご論文で拝見した通り、先生のお仕事は、つねに凄まじいパワーと緻密な調査によって成り立っていました。次々に出る先生のご論文を前に、私はいつも自分を情けなく思うばかりでしたが、それでも挫けずにやってこられたのは、ひとえに「先生に恥じない仕事をしたい！」と思いつけたことによります。なかなか就職が決まらず、研究を投げ出しそうになる度に、先生のお言葉を思い出して、勇気を奮い立たせました。先生は、私の憧れ、目指すべき研究者の鑑でした。

前任校に就職が決まった時、私の頭に真つ先に浮かんだのは、両親でも大学の指導教官でもない、深沢先生でした。お目にかかったことはおろか、直接お話をしたこともありませんでしたが、私は迷わず、深沢先生に電話をかけて、就職の報告をしました。はじめて聞いたお声は、想像通りに穏やかで、私の電話に感激して声を震わせながら、こうおっしゃいました。「おめでとー！一つ一つの仕事を大切に、学生から好かれる先生になってください！」

その言葉を聞いた時、「ああ、先生は、研究者の鑑だけではなく、教育者の鑑でもいらつしやつたのだ。真に研究を志す者は、かくあらねばならないのだ」と、私は改めて痛感しました。

## 榎本 渉先生

榎本先生を「先生」とお呼びすると、ご本人が一番嫌がられる気がします。榎本氏との出会いは、私が前任校に赴任したばかりの頃。歴史学の若手研究者が集まって、長崎県北松浦郡の鷹島をフィールドワークする企画があり、図々しくもそれに参加したことに始まります。私よりずっと若い研究者の方々に交じって貧乏旅行をしながら、鷹島の後も、平戸、佐世保などを巡って意気投合しました。当時、まだ東京大学大学院の院生だった榎本氏は、初対面で、「あいさつ代わりに」と、いきなりハイレベルの学術雑誌の抜き刷りを、三種類も差し出しました。不意打ちのストレートパンチでした。

その後、同氏は、東京大学史料編纂所の助手を経て、現在は国際日本文化研究センターの准教授となっています。出会いからわずか十年余で、同氏は、三冊のご単著と、岩波書店・勉誠出版社のシリーズ物のご著書と、数知れないご論考を発表されました。その桁外れた才能には、ただただ脱帽するしかありません。豊富な知識、それに慢心しない弛まざる努力、切れ味鋭い洞察力、どれをとつても私とは、天と地ほど差がある大きな才能を有される人物ですが、同時に、人懐っこい笑顔と、独特の雰囲気を持ち、多くの先学に愛される人物でもあります。

しかし、改めて氏の偉大さを実感したのは、二〇〇九年に、私が、前任校で小規模な研究会を主催した時のことです。同氏と私を含めて、わずか三名の発表者をなさいました。その発表内容の壮大さ、研究史料の膨大さ、調査の詳細さに、私は言葉を使い、呆然とするしかありませんでした。日頃の、氏の穏やかなお人柄に感わされ、うっかり同氏の本質を見誤っていました。「どんな小さな研究発表会でも、手を抜かない」その姿勢が、氏の偉大さを、すべて物語っていました。研究会後の懇親会で、私が、「やはり史学研究をする人には史観がある。文学研究者とは違う」と申しますと、同氏は「文学だ、史学だって、それがなんなんですか。要はやっていて面白いかどうかでしょう。文学とか史学に分ける意味なんてないですよ」と言い切られました。

文学研究と歴史学研究的の狭間を学び、学際研究などと称しながら、その実、己の立脚点が見えなくなっていた私の胸に、同氏の言葉が突き刺さりました。「本当にすごい研究者は、時代や分野を軽々と飛び越えて、真の価値を見出すことができる」と、同氏は、私に教えて下さいました。

この研究会で発表された原稿をもとに、同氏は、二〇一三年三月、『南宋・元代日中渡航僧伝記集成 附 江戸時代における僧伝集積過程の研究』として、五四〇頁を超える大著を纏められました。私は、当時発表していた原稿を、未だに著書にすることができていません。先日、同氏から「いつになったら、本になるんです？三か月あれば、書けるでしょう？」と催促されました。まさに、完敗です。

#### 長島 弘明先生

長島先生には、名古屋大学大学院の修士課程の際に、指導教授をしていただきました。不肖の弟子である私が、先生を師匠と呼びするのは誠に恐縮なのですが、今回はご寛恕いただきたいと存じます。長島先生は、私の修士課程終了後、

まもなく、母校の東京大学大学院へご栄転となり、直接ご指導をいただいたのは、わずか三年ほどではありましたが、その短い期間に多くのことを学ばせていただきました。

長島先生のゼミは、いつも先生のソフトな語り口とシビアな批評で、独特の緊張感を持っていました。先生は学生の発表を聞いていないようであり、つねに核心をつくご質問をなさいました。それは、その者の論点を打ち砕くような鋭さを秘めていました。先生はご存じなかったかもしれませんが、院生の間では、「長島先生はね、食べたときは何ともないけれど、後からピリピリくる『ワサビアイスクリーム』だよ」と言われておりました。

私の修士論文をご覧になった時、先生は次のようにおっしゃいました。「君は大変、活きのよい素材を見つけた。ピチピチの鯛だ。しかし君の論文は、その鯛を、そのままバスンと皿に載せ、上からバラっと塩を振りかけ、『さあ食え』と言っているようなものだ。せめて、火は通しなさい。生なら、鱗ぐらい取りなさい。」

まるで金槌で頭を殴られたかのような衝撃が私を襲いました。「ワサビアイスクリーム」どころではありませんでした。そうです。当時の私は、誰も手を付けていない新資料の発見をして、それに有頂天になっていました。そしてその資料を分析する努力を怠ったのです。先生は、私が何一つ、素材を読み込んでいないことを、確実にご指摘になりました。口頭試問の間ずっと、恥ずかしさで居ても立ってもいられず、涙をこらえるのに必死でした。

あの時の恥ずかしさ、情けなさ、今、自分が資料と向き合う際の教訓となっています。すべての可能性を読み込んだか。まだ違った解釈ができないか。新たな着眼点はないか。読み込めば読み込むほど、行間に新解釈の可能性が浮かびます。「研究に終わりはない。可能性は無限大だ。それをいかに引き出すかが、研究者なのだ」と、長島先生は教えて下さいました。

三名の先生方から与えていただいたさまざまな経験が、現在の私の教育・研究の基盤を作っています。まだまだ理想には程遠いですが、先生方に恥じない仕事ができるよう、先生方のお教えを胸に、日々、精進し続けたいと思います。いつか私も、先生方のようになれることを、夢見て…。